

## 本の旅

### ◆選書ツアー (P.2)

### ◆私をかえた一冊の本 (P.6)

## 公立大学図書館を取り巻く状況と 本学の課題(1)

山田 千香子

(図書情報センター長)

公立大学の存在意義は「教育」でしょうか、「研究」でしょうか。あなたの図書館は、学生に対する教育・学習活動を支援する図書館ですか、それとも教員の学術研究活動を支援する図書館ですか。という問いかけが、先日開催された第39回公立大学協会図書館協議会総会の基調講演において齊藤明氏(福岡県立女子大学副理事長)から出された。教育図書館、あるいは研究図書館なのか、本学の図書館の現状と位置づけを考えてみたが、その場において明確な回答を出すことはできなかった。

現在、大学図書館の基本的な役割として(1)「高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤としての図書館」、さらに(2)電子化の急激な進展に伴う「電子情報と紙媒体を有機的に結びつけた新たな意味でのハイブリッド・ライブラリー」の実現が求められている<sup>注1</sup>。前者の高等教育基盤としての図書館に期待される役割には、教育研究支援や学生に対する学習支援がある。大学は高等教育機関として社会からの期待・要請に応えるべく教育研究を有効に展開させること、それと同時に学生の学習を向上させるべく努力し、さまざまな教育プログラムを展開している。このような大学教育研究プログラムの枠組みの中核となる基盤的施設として大学図

書館は位置づけられてきた。大学設置基準の大綱化(1991年)以降の大学改革内容が、教育機能の質的向上を目指す「学士課程」教育の改革であったことを考えてみても、「公立大学の存立基盤は何といても学部学生であり、これらの学生のためにどのような図書館であるべきかを考える必要がある。その結果、やはり教育・学習支援図書館であるべきである。」という齋藤氏の論旨は、明解で説得力をもつものであった。

現在、本学学生の図書情報センターの利用度は高いとは言えない。まず、学生に対する教育・学習支援の第一歩として、基本的に「学生が本に親しみ、本を読む習慣をつけさせる」という課題とともに、利用の促進を図ることがあげられる。本の魅力を語りかけ利用度を高めていく工夫や、教育プログラム(授業)と図書館の関係を緊密にすることが必要となっている。シラバスに記された教科用図書の提供や部数確保などは、その第一段階に位置づけられる。今回、本号の企画テーマである「選書ツアー」もそれら一環の取り組みとして実施されたものである。参加学生から広がる今後の成果を期待したい。

大学図書館の基本的役割である後者の電子化への積極的な対応については、インターネットやウェブの普及、さらに資料のデジタル化に対応した図書館の役割、課題とする「機関リポジトリ」への対応も重ね合わせて次の機会に紹介させていただきたい。

注1 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」2006年3月。



# 選書ツアー

## 選書ツアー開催のいきさつ

谷澤 毅

(収書委員長)

図書情報センターは、このたび初めての試みとして、学生自身が直接書店に赴いて図書館に収める書籍を選ぶ機会を設けました。選書ツアーと名づけられた、このような催しが行なわれた背景には、やはり学生の読書離れがあります。携帯電話やパソコンがこれだけ普及してくれば、それだけ学生が書籍に接する時間は減っていきます。日々の生活のなかで読書が占める比重も、以前と比べればはるかに小さくなってきました。こうした現状は、図書情報センターにおける学生の利用者数の低迷からもうかがうことができます。

何とかして学生に本を読むことの意味、そして何よりもその楽しさを知ってもらいたい。書物との出会いの場として図書情報センターを活用してほしい。そのような願いを込めて、このたび学生と本との出会いの場が設定されました。自分が直接手にして選んだ本が本棚に並ぶのであれば、図書情報センターに対する親しみも増すのではないかと考えて計画されたのが、選書ツアーです。

選書の会場は福岡の紀伊国屋書店を選びました。開催当日の6月21日(木)、参加者の募集に応じた学生7名と図書情報センターの職員2名、それに教員2名の計11名が佐世保駅に集合して鉄道福岡へと向かい、2時間ほどの選書に臨みました。一人当たりの予算は8万円。学生は3組に分かれ、選書に際してはポータブルリーダーが用いられました。自分の所有物にはならないとしても、気に入った本をこれだけ大量に一度に選ぶことができたこのツアーは、参加者に忘れがたい印象を残したのではないかと思います。そのような

記憶が刻印された本が図書館に配架されれば、再びそれを手にすることができますし、またほかの誰かがその本を読むことで感銘を受けることもあるでしょう。図書館とはそのようにしてできる人と人との見えないつながりの、いわば結節点です。たくさんの人が本を通じて結びついて世界を広げてほしい。今回の選書ツアーも、そのような期待から計画されたささやかな試みです。



## 選書ツアーに参加して

### 貴重な役割と経験

永井利明  
(経済学科4年)

日頃から毎月5冊ぐらいのペースで希望図書をお願いしている縁があって、選書ツアーに参加させていただくことになりました。選書をした会場である紀伊国屋福岡本店は博多駅の横にあるため、就職活動で福岡と佐世保を行き来するときにはたまに暇つぶしや気分転換で訪れていました。ある程度どこに何があるかは把握しているつもりでしたが……。問題はそこではなく、思っていた以上に良さそうな本を見つけるのが難しい。普段からいい本があるとチェックはしていたのですが、ぐるぐる駆けずり回ることになりました。政治から社会、美術、教育、経済分野など幅広くメジャーなものからマイナーなものまで既に図書情報センターに所蔵されていないもの



を選ばなくてはと思いながら慎重に選んでいきました。終わったあとはひどく疲れを感じましたが、何か達成感に似たものを感じました。最後となりましたが、今回は貴重な役割を担わせていただきありがとうございました。

## 「8万円分」の本

村上 嘉章  
(経済学科4年)

今回、図書館主催の選書ツアーに参加し、自分が読んでみたい本や読んでもらいたい本を中心に選ぶことができたと思います。選書の時間は約2時間、8万円分の本をじっくり選んでいたのもう少し時間が欲しかったというのが本音です。選書をしているときも予め選ぶ予定だった本を忘れてしまうほど読みたい本が次々に見つかり、選ぶという作業は楽しかったです。一度に8万円分の本を選ぶという経験をしたことが無かったのですが、購買意欲をかき立てられました。漫画と雑誌は駄目という制約を除けばジャンルを問わず選ぶことができるので、本が好きな人や読みたい本があるのに図書館に置いていないと感じている人にとっては最適なイベントだと思います。学生の間はゆっくり本を読む時間がたくさんあるので、興味のある本を探しに選書ツアーに参加してみてください。そして、選書ツアーは今後も継続して行ってほしいと思います。

## 選書で広がる視野

江上 英明  
(流通学科4年)

何気なく本の貸出の手続きをするため、カウンターへ立ち寄ると司書さんから「選書ツアー」について案内された。インターネットや書店を利用して欲しい本を探してきては、よく司書さんをお願いし購入して頂いていた



ので、この話は願ったり叶ったりだった。

私も大学4年生！そろそろ卒業論文の執筆に取り掛からねば、という時期である。テーマは漠然としていたが「物流」と決めていた。何かヒントを探そうと物流に関する本を探していたが、なかなかお目当ての本を探し出すことができずにいた。物流に関する本は発行年が古く、参考になるものが少なかったのである。そこで、「選書ツアー」を活用して本を探し出すことに決めた。

選書ツアーで訪れたのは、福岡にある紀伊國屋書店だった。全国展開している書店なので欲しい本もすぐに見つかるだろうと思っていたが、物流に関するコーナーは意外に小さく、探したい本もほとんどなかった。しかし、この広い店舗内には私の好奇心をかき立てる本が他にもたくさんあり、時間ギリギリまでいろいろな本を選書して回った。選書しているうちに、本に対する自分の視野が確実に広がっていくのを実感することができた。

現在、活字離れが若者の間で深刻な問題になっている。まずは、図書情報センターに足を運んでみてはどうだろうか？そして、次の「選書ツアー」にぜひ参加して欲しい。たくさん本と触れ合うことで、あなたの本に対する考え方が変わるの間違いはない！





## 「図書館の本」を選ぶ

山口 春 菜  
(経済学科3年)

私がこの選書ツアーに参加した理由は、専門書の他にも現代文学を充実させて欲しいと思ったからです。

選書方法は、専門の機械でバーコードを読み取っていきました。1人8万まで選ぶことができたので、読んでみたい本を多く選ぶことができました。時間は2時間とたっぷりであるように思ったのですが、終わってみるとあっという間だったなぁと思いました。自分が読んでみたい本を中心に選んでいったのですが、図書館に置く本を選びに来たのだという事を意識し、新書、海外文学等のコーナーも回り選びました。

私は、本が好きなので、私の選んだ本を他の人が読んで好きになってもらえると嬉しいなぁと思いました。

## 参加できなかったみなさんへ

柏木 久 美  
(地域政策学科3年)

初めての選書ツアーということだったので、どのような本を選ぼうか、選べばよいのかと迷いました。個人的な好みでどの程度まで選んでよいのか…と悩みましたが、結局は相当個人的な好み反映された選書結果になってしまいました。時間ももっとたくさんあれば良かったのに、と感じました。時間に余裕があればもっと本を吟味できたことだろうと思います。予算を有効に使うためにも時間は重要だと感じました。とはいえ、おもしろいツアーでした。

書店ではどのような人が働いているのかを少しですが、みることもできました。また、他の人たちがどのような本に興味を持っているのか、どんなことに興味があるのかなどを

知ることができておもしろかったです。普段、自分ではなかなか興味を持たないような本を選んで姿を見て、私自身の視野も広がると感じました。また、もっとたくさんの方が参加すれば、もっと幅広いジャンルの本たちをみんなに見てもらえてよいと思いました。

選書ツアーに参加したくても授業などの関係で参加できなかった学生もいたと思うので、そのような学生に対して事前にどのような本が欲しいのか尋ねておいて、そのような本を図書情報センターに入れるのも良いのではないのでしょうか。図書情報センターに入れて欲しい本はカウンターで申し出を受け付けていますが、そのことも含めてもっと学生に対するアピールが必要かもしれないと感じました。今後、選書ツアーが継続されると嬉しいです。

## 変えるためにできること

黒田 真 包  
(地域政策学科3年)

今回、私が選書ツアーに参加したきっかけは、図書情報センターに自分の読みたい本が少ないと思っていたからです。「もっと多くの本があればいいのに」、「本の種類を増やして欲しい」という事を常日頃から思っていたことから参加を決めました。

選書にあたっては一人8万円という予算設定があり、金額の大きさに驚きました。「こんなに使っているのか」というのが、最初聞いたときの率直な意見でした。それと同時に、





8万円を使いきれぬのかという思いも湧いてきました。でも、費用は絶対に使い切ってやろうと思い、どんな本を買うのかという事を準備して行きました。選書当日は選書に2時間半ほどの時間しかなく、駆け足状態での選書となりました。書店の中を何度も行ったり来たりしながら自分の欲しい本を探し、見つけたら情報を読み取るという作業を繰り返しました。すると、時間が経つ毎にどの本を選んだらいいのかということの判断ができなくなってきて、軽いパニック状態に陥り、選書終了時間には本当に疲れていました。

私は今回初めて学校からの呼びかけに参加しました。今までは、自分には関係ないといった意識が強くあり、不満を持っていても解決のために動いたことはありませんでした。しかし、自分から積極的に参加しなければ変わらないということを実感し、参加してよかったと思いました。学校に対して何か改善して欲しい点があり、その解決の機会が与えられたなら積極的に参加した方がいいと思いました。

## 本の見方が変わります

又吉 勇 慎

(流通・経営学科3年)

今回の選書ツアーでは、今まで普通に書店に行くのとはまた違った見方で書籍を見ることができました。それにはいくつかの理由があると思います。

まず、書籍の数が非常に豊富で、かつその分野も幅広く扱っている書店で見ることができたのは非常に素晴らしいと思いました。

もちろん図書情報センターにも価値のある専門書が豊富に揃っています。しかし、実際に書店に行った場合、自分の好きな分野をピンポイントで選べて、かつ最新の書籍を手にとって選ぶことが出来たのは、とても貴重な経験になったと思います。



次に、選書時間が2時間半と制限されていたことです。制限時間があると、じっくり選ぶゆとりがなくて焦ってしまうのではないかと、行く前に思っていたのですが、その心配は杞憂に終わりました。なにも陳列されている本を片っ端から読むわけでもなく、選ぶ本もその場では内容の確認程度にペラペラめくって読めばいいので、十分しっかり選びきることが出来ました。

そして次に選ぶ本の制限が冊数ではなく、合計金額だったというのも良かったと思います。今回は一人当たり8万円という、個人の一回の買い物では考えられないような予算だったので、このことも、私が高いモチベーションで選書が出来た理由の一つだと思います。

今まで、自分ひとりで書店に行って書籍を買うとしても、せいぜい2、3冊買って合計5,000円前後しか出すことができません。よって今までは5千円以上の専門書は選ぶことが出来ず、無意識にそういった本を避けていたとも思います。それを今回、予算8万円、つまり「8万円握りしめて、書店に来た」つもりになって選書をする事ができました。すると、本の金額をほとんど気にせずに、冷静かつ大胆に、本当に興味のある濃い内容の専門書も、ほとんど躊躇なく選ぶことが出来ました。

今回の選書ツアーでは本当にいい経験が出来て、書店での本の見方が変わりました。次の機会があれば、また是非参加したいですし、知識欲がくすぶっているような友人も誘って、より素晴らしいものにしたいと思います。



# 私をかえた一冊の本

## フランクフル『夜と霧』

(みすず書房、1961年3月)

をめぐって

岩井隆夫

(経済学科教授)

ドイツ語に「夜のやみにまぎれて」を意味する"bei Nacht und Nebel"という表現がある。この表現の中の"Nacht und Nebel"を文字通り訳すとすれば、「夜と霧」という意味である。アルプスよりも北にあるヨーロッパの各地で生活したことがある人は誰でも体験することであるが、秋の終わりの11月は冷たい雨と霧の天候が続き、本格的な冬を前にして憂鬱な気分がもたらされる季節である。ナチス政権下のドイツにおいて、ユダヤ人を家族共々逮捕・連行して各地の強制収容所に送り込む命令が布告される。この命令は「夜と霧」命令と名付けられていた。

1997年9月2日、一人の精神分析学者が心臓病のため、オーストリアのウィーン市内の自宅で死去した。享年92歳。ウィーン市長は訃報に接して「ウィーンと世界は、偉大な科学者というだけでなく、今世紀の精神と魂の記念碑でもあったフランクフル氏を失った。」と述べた。このフランクフル氏こそ、日本語タイトルの書物『夜と霧』の著者であるヴィクトル・フランクフル (Viktor E. Frankl) 氏である。原書のタイトルは「或る心理学者の強制収容所体験 (Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager)」であるが、訳者と出版社は敢えて「夜と霧」のタイトルを付して出版した。

ウィーン大学の精神分析学者であったフランクフルはユダヤ人であるという理由で、家族共々「夜と霧」命令により逮捕・連行され、妻と子供はガス室で虐殺され、フランクフル自

身はアウシュヴィッツなどの強制収容所に送られ、過酷な強制労働と劣悪な収容所生活を体験し、ドイツの敗戦を前にして奇跡的に解放され、自分の体験を書き記したのである。

この書物は現在に至るまで私の心の支えとなっている書物の一つであるが、この書物の存在を知ったのは、大塚久雄 (1907-96) の著作集 (全13巻、岩波書店) に収められていた書評によってである。西洋経済史の勉強を始めた頃、大塚久雄の著書や論文だけではなく、彼の著書の中で引用されたり紹介されている書物や論文のうち、日本語で読めるものはできる限り読むことに努めていた。

「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならないのである。哲学的に誇張して言えば、ここではコペルニクスの転回が問題なのであると云えよう。すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身が問われた者として体験されるのである。」〔フランクフル『夜と霧』(みすず書房) 183頁〕

この一節を読んだときに、自分から何かを求める姿勢は受動的・消極的であり、自分が何を求められているかを考える姿勢こそ能動的・積極的であることがはっきりと自覚できた。研究者としての道に踏み出そうとする自分には将来に対する明白な見通しが無いに等しいにもかかわらず、故 J.F.ケネディ大統領 (1917-63) が就任演説において、「祖国に何かを期待するのではなく、祖国が何を期待しているかを考えて欲しい。」とアメリカの市民に訴えたのも、おそらく同じ意味であることに遅まきながら気がつき、言いようのないささやかな自信が芽生えたのである。



## 丸山眞男『日本の思想』 (岩波新書、1961年)

南島和久

(地域政策学科講師)

自分の人生に大きな影響を持ったということが出来る本はいくつもある。専門の道に入れば惚れた著作はいくらでもあるし、そういう著作を目標ないし糧として生きるのが研究者の常である。ただ、ここで紹介すべきなのは、読者が気軽に手にとって読んでみようと考えうる著作であろう。そこで、さしあたって入手の容易さなどにかんがみ、岩波新書の中からひとつ選んで紹介することにしたい。

ここで紹介する本はすこし古いが、丸山眞男の『日本の思想』(岩波新書、1961年)である。丸山は日本政治思想史を専門としていた政治学の泰斗である。東京大学では南原繁に師事し、戦後、「超国家主義の論理と心理」

(『現代政治の思想と行動：増補版』未来社、1964年)をはじめとした日本ファシズムへの内在的批判で著名となり、一時期は、いわゆる市民社会論派として経済史家の大塚久雄などともならび称された。1996年に他界したが、その際にはNHKで特集も組まれたほどである(『丸山眞男と戦後日本』(NHKビデオ、みすず書房)を参照)。

さて、『日本の思想』のなかでも有名なのは、「ササラ型とタコツボ型」(同書129頁)や「「である」ことと「する」こと」(第四章)などのキャッチフレーズである。「ササラ型」とは根本が一緒だが毛先の方が分かれている状態を指し、「タコツボ型」とは文字通り孤立し並列している様を表現している。丸山は日本の学問状況の説明にこれを用い、もともと個別科学の「根」は共通であったが日本に輸入されるときに「毛先」だけが輸入されタコツボ化したのだと論じた。また、「「である」こと」というのは、要するに相手の「格」に

応じた対応をしなければならない儒教秩序のことであり、日本はそうした「〇〇である」ことを大事にする社会だと指摘した。近代化の過程で徐々にここから脱皮し、「「する」論理」へと移行する—つまり業績本位な世界に移行する—ことになるが、「である」社会の住人は、往々にしてこの論理について行くことができずノイローゼ症状を呈する場合もあるとしたのである。

これらの議論は、同書の後半の有名な二つの章のものである。他方、前半の二章も論文調で若干難しいが面白い。ひとつは「日本の思想」、もうひとつは「近代日本の思想と文学」である。とっかかりとしては第二章の方がよいと思われる。要するに同書は後ろから読んだ方がすんなりと読めるということである。体系的に並べると冒頭からのならびとなるが、もともと独立したものなので、ひっくり返して読んだところで差し支えない。

さて、この本を薦めるのは、わたくしたちの思想問題の重要な点を指摘する知的な啓蒙書という理由からである。思想は自己内の緊張感ある対話を通じて発展性を獲得する。さらには、社会を発展させるために何が必要なのかということについて、あるいは学問とは何かということについて、同書は深い洞察を与えてくれると思う。





## 増田四郎『大学でいかに学ぶか』 (講談社現代新書、1966年)

谷 澤 毅

(流通・経営学科准教授)

この本に出会ったのは、大学を卒業した後のことである。

一般企業に入社した私は、研修期間こそはまじめな新入社員であった。しかし半年も過ぎて、仕事の内容もぼちぼち本格化してくるようになると残業も増えてくる。好きな本も満足に読めない。何とかして会社を辞めて学生生活に舞い戻りたいと考えるようになった。無論、学生生活を一からやり直すつもりはなかった。世間体もちゃんと考慮していたのである。将来のことを考えるのであれば、ここはやはり大学院進学を考えるべきではないか。何を勉強するかは、まだ決められないが、幸い自分なりに続けてきた読書の蓄積はある。できれば本がたくさん読める分野を勉強したい。もし学生になれるのであれば、今度こそはまじめに勉強しよう。こうした再度の学生生活への期待を胸に抱きつつ、モチベーションを喚起させようとして手に取った一冊がこの本であった。

著者の増田四郎(1908～1997年)は、大塚久雄とともにわが国の西洋経済史研究をリードしてきた研究者の一人。一橋大学で長きに渡り教鞭をとり、やがて学長に就任、1995年に文化勲章を受章した。この本が刊行されたのが1966年だから、経済史研究者

としての著者の評価がすでに確立した頃の著作となろう。だが、著者の語り口は思いのほか謙虚である。学ぶことの意味やその方法、歴史研究と現代社会とのかかわりなどが、おもに著者の学生時代の回想や経験をもとに語られる。ことに著者が、哲学ではなく歴史を専攻するきっかけとなったエピソードが印象深い。経済史の大家の率直な回想に私は大いに勇気付けられたものであった。加えて学問のすばらしさ、それを若い人に伝えようとする熱意が、決して器用とはいえない言い回しで本書のいたる所から伝わってくる。増田四郎のような研究者になりたい。専攻分野は西洋経済史に難なく決まってしまった。結局私は1年3ヶ月ほどで会社を辞め、大学院進学のための準備に専念することになった。

この本が刊行されたのは、今から40年も前である。学問の尊きを基調とする本書の内容は、大学の社会的な役割が大きく変化した今日からすれば、古臭いとの感は否めないであろう。教養なるものの威信が失われた現在、社会が大学に寄せる期待、学生が大学で得ようとする知識は、40年前とは異なるはずである。私も本書を今の学生にぜひとも読めと勧めることはしない。でも、雑談の折などに、ほのかな期待を込めてこの本を紹介することがある。目立たなくとも、地道な努力の積み重ねからこそ大輪の花が開く。今の時代に見失われがちな、このあたりまえともいえる著者のメッセージを、やはり若い人に伝えたいのである。

## 図書情報センターからのInformation

- ◆ 図書情報センターHPアドレス <http://www.nagasakiu.ac.jp/institution/lib/index.php>
- 当センターは本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前9時～午後9時まで(学生の休業期間中は午後5時まで)  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日(6/7)

編集責任／長崎県立大学収書委員会 発行所／長崎県立大学図書情報センター 発行日／2007年7月27日